持ちし四人の男あり。次に太刀負ひし社家一人。御旗負ひし社家一人騎馬にて從ひ。次に五人にて持てる鉾十一本。次に大太鼓。次に猿の面を冠りしもの三十人。次に神人六十人。次に伶人二十人、各々樂器を口にして歩みながら奏ず。次に傘持次に鷹匠、各々陶製の鷹を手にす、其數十人。次は床几二臺、金幣、これに次て御本社神輿、多數の人これをかき、又太鼓あり。次に左神輿。次に右神輿。最後に諸役人及雨具など持ちしもの數十人隨ふ。一列七八丁に及び奇觀いはん方なし。此行列は御旅所にゆきて東遊びの舞あり。後本社へ歸るなりといふ。

六月三日 晴

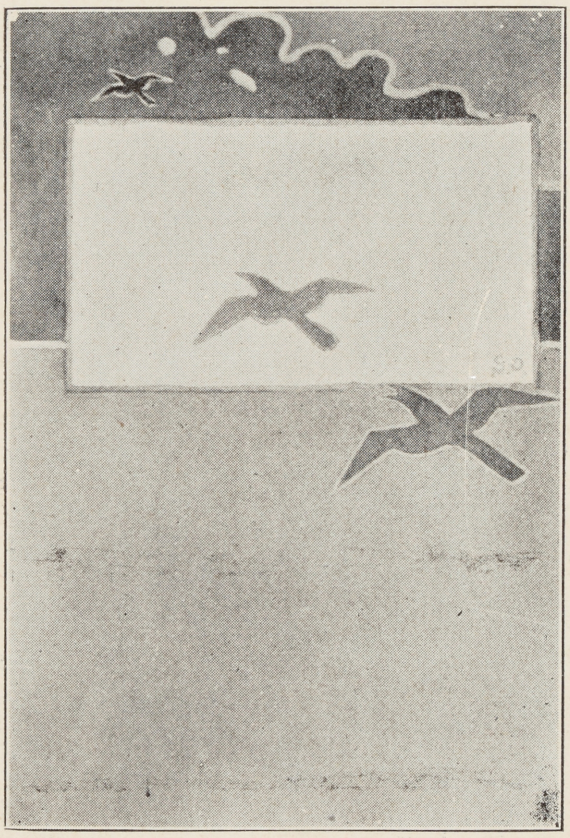
三枚の水彩畫、結果はあしかりしも得る事多く、名高き祭りも見たれば今は用なき身の、朝の汽車にて都に歸りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

目白の原

繡眼兒

雜司ヶ谷の鬼子母神より南へ二三丁、目白停車場の東に學習院用地の廣大な原がある。土地は自然に高低を成し、頗る樹木の種類に富んでゐる。南の方は崖で、一帶の稻田を挿んで戸山に對し、甚だ眺望がよい。停車場の近くには、水は濁つてはゐるが可なり大きな池もある。



夕暮　一等　　大橋三平

春は若草の綠やさしく、美しい草花で地も見えない處もある。煙るが如き新綠の頃は最もよく、樫の紫を帶びた綠、椎の茶褐色、栗や欅の深き綠、杉の白綠、柿の綠の暖かに黃なる、皆それ〴〵趣があつて、研究には此上もない時期である。夏は繁りて暗き森の中より、綠草の明るく透けて見える處や、蔓りわたる雜草の中を、**タケニグサ**の群を拔て我は顏なる。秋は一面の薄原、樹々の梢も色變りて面白く。冬は白茶色の淋しき草原に、常磐木の大樹ところ〴〵。何れか寫生の好材料にあらざるはなし。樹木や草を描くに苦しむ人は往け、往て此豐富なる材料を寫して、植物寫生の趣味多きを悟り給へ。